

act

29

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館

アクト第29号

October 2018



『書を捨てよ町へ出よう』

演劇作家 藤田貴大

様々な分野の作家とのコラボレーションを通して、研ぎ澄まされた俳優、音、照明、衣装などの要素を一つの劇空間に編集していく藤田貴大さん(マームとジブシー主宰)。総合芸術としての演劇を追求する彼が「コラボレーションの集大成」と話すのが、11月に札幌市教育文化会館で上演される『書を捨てよ町へ出よう』(寺山修司作、藤田貴大 上演台本・演出)です。2015年初演時の核はそのままに、2018年版としてアップデートされる本作の魅力とは？

Photo : Hiroo Takatsu [STUDIO TAKE 2]



『書を捨てよ町へ出よう』

撮影: 引地信彦(1、2、4、5、6、7) 井上佐由紀(3)



70年代に演劇実験室◎天井桟敷を率い、数々の伝説を残した寺山修司。稀代の天才と評される彼が書籍、舞台、映画の形で発表したのが『書を捨てよ、町へ出よう』。

本作が、2015年に東京芸術劇場のシリーズ企画として、藤田貴大さんによる演出で上演。寺山の作品世界を独自の解釈で鮮やかに現代へ蘇らせ、大きな話題を呼びました。そしてこの秋、満を持しての再演となります。

MUM & GYPSY

今という時代に寺山さんの言葉を考えることができるのは、作家として幸せなこと

—藤田さんは高校まで北海道の伊達で過ごし、大学からは東京ですね。自身が主宰する「マームとジプシー」は学生時代に立ち上げたのですか？

役者志望で上京したのですが、自分は役者じゃないかもしれないと結構悩んでいて。大学時代の最後に、自分は書くことをしようと思って立ち上げたのが、マームとジプシー(以下、マーム)です。そこから、劇団員を抱えずに公演ごとにキャスティングするスタイルで、10年間やってきました。

—26歳の時に岸田國土戯曲賞を受賞しますが、変化などはありましたか？

受賞を機に大きい劇場を任されるようになって、集客もそれまでの2000人規模からいきなり1万人を求められるようになったので、今考えると当時は大変だったと思います。今の自分たちじゃダメなんだということもシンプルになり、ミュージシャンや漫画家の人たちと意識的に関わったりして、コラボレーションする方向へ転換していきました。30歳までは、演劇という土台の上でどうコラボレーションするかが一つのテーマになっていて、『書を捨てよ町へ出よう』はその集大成だと思っています。例えば、音楽家に対する態度として「劇判を作ってください」とか、デザイナーに対して「こういう役柄の人に着せる衣裳を提供してください」というような、音楽や衣裳が演劇を成立させるための付属品でしかない作品っていっぱいあるじゃないですか。

—いっぱいありますし、そもそもそういうものだという概念の方が強いんです。

だけど、僕が言う「コラボレーション」では、僕と同じレベルでファッションデザイナーや音楽家がいてほしいんです。いろんな作家が等価に演劇に取り組む状態を作るにはどうしたらいいのかを考えていたのが、30歳までの時間だったと思っています。例えば、最初に「このスカートを何着作ってほしい」みたいな言い方をしちゃうと、作り手側にとってそれがミッションになってしまって、そこで思考が停止してしまふ。それよりはもっと漠然としたこと、今回だったら「舞台美術は銀色だと思っているんだよね」ってことしか僕は伝えていないんです。でも、結果として、ものすごくそれに合う音楽や衣裳を作ってきてくれる。いろんな作家の脳みそが何個もある状態を、僕が作品に仕上げていくみたいな感じです。演出家って偉そうに言うけど、今回は演出家というより、学校祭の実行委員長のような感じだと思っています。

—本作は、21世紀の日本演劇のルーツと言える60~70年代のアングラ時代に生み出された優れた戯曲の数々を、時代をリードする若手演出家の感性と解釈に委ねて、改めてその魅力を見つめ直すという東京芸術劇場の「RoOTS」シリーズ第三弾として制作されました。

寺山さんの作品を演出してほしいと話が来た時、自由度のあるものがないなと思いました。その点、『書を捨てよ〜』は舞台版の他に映画版とエッセイもあるけれど、そのどれもが違って、何が本当の『書を捨てよ〜』なのかわからないところが寺山さんばいと思う。彼は演劇の人でもあるけれど、競馬評論家でもある。短歌も俳句もやっていて、優れたエッセイストでもある。でも、実際のところどれ

が本当の寺山修司なのかわからない。『書を捨てよ〜』というタイトルしか確かなものではなくて、いろんな見え方を持つ作品に僕が取り組んだら面白いんじゃないかと思いました。

—本作のチラシは、宇野重喜良さんがイラストレーションを手がけています。マームは芝居本体だけでなく、その周辺のことや関わる人など、宣伝の段階から興味が湧きますね。

今は家で何でもできる時代だけど、僕の職業は人を家から出す職業なんですよね。ミナ ペルホネンの皆川さんともよく話すのですが、洋服屋さんからDMが届いて、店に足を運んで洋服を買う行為って、演劇を見てもらう仕組みと変わらない気がします。そうやって人を家から出すことに意識的に取り組まないと、今は多分人を呼べないんじゃないかな。一方で、僕はそれに期待もしている。クオリティの高いものやちゃんと考えられた空間が街中に広がっていけば、人はやっぱり外に出ると思っている。『書を捨てよ町へ出よう』というタイトルが好きな理由もそこですね。家にいたって始まらないことがどうやらあって、だから、まずは一回町へ出てみようって、よく寺山修司はあの時代に言えなと思います。今この平成が終わる年に僕が考えていることを、60、70年代の新宿で考えていた彼の感性や感覚ってすごいし、どの作家よりもみずみずしい言葉が残っている人だと思います。

—舞台化するときに時代性についてはどのように考えましたか？

アングラと言われた精神やイメージを継承している人はいるけれど、それは僕の仕事じゃないと思いました。寺山さんの言葉や意思みたいなものに対しては真面目に取り組むけれど、ビジュアル面については、まるでアングラとは言えないようにしたい。意思について言うと、60、70年代の新宿で表現に携わっていた若者たちは安保闘争や学生運動にも参加していて、演劇でもそれらを扱ったものがたくさんありました。その時代の感覚は今にも通じる話で、出し方は違うかもしれないけれど、僕らが社会と向き合う時も多分あの頃の若者たちと同じことを考えている気がするんです。今という時代もとんでもない時代で、いろんな現実があるじゃないですか。その中で寺山さんの言葉を考えることができるのは、作家としてすごく幸せなことだと思います。

—11月の札幌公演がとても楽しみです。

再演するにあたって、3年前の着想点は大切にしつつも、一つひとつの断片は変えようと思っています。俳優にインタビューし直して、映像も全部撮り直します。又吉さんにも新作のコントも書き直してもらっているところです。2018年バージョンの『書を捨てよ〜』にアップデートしますので、楽しみにしてください！

PROFILE

藤田 貴大

Takahiro Fujita

マームとジプシー主宰/演劇作家。1985年生まれ。北海道伊達市出身。桜美林大学にて演劇を専攻。2007年にマームとジプシーを旗揚げ。以降、全作品の作・演出を担当。11年6月-8月にかけて発表した三連作『かえりの合図、まっけた食卓、そこ、きつと、しおふる世界。』で第56回岸田國土戯曲賞を26歳で受賞。以降、様々な分野の作家との共作を積極的に行うと同時に、演劇経験を問わず様々な年代との創作にも意欲的に取り組む。

藤田貴大©篠山紀信



『書を捨てよ町へ出よう』の見どころチェック！

様々なジャンルの作家が演出家と等価のレベルで演劇に取り組み、それが一つの作品世界となるマームとジプシー。『書を捨てよ町へ出よう』で楽しむことができるコラボレーションとは？

1 collaboration 寺山修司

70年代に演劇実験室●天井桟敷を率い、劇作家・演出家としてだけでなく、詩人、歌人、小説家としても活躍。『書を捨てよ、町へ出よう』というタイトルで製作した書籍、舞台、映画のうち、本作の下敷きになっているのは映画版。「映画の脚本から台詞をかなり丁寧に取り上げていて、エッセイからも僕なりに演劇にしています」と藤田さん。



撮影:有田泰而 提供:テラヤマ・ワールド

2 collaboration ミナ ペルホネンの衣裳

デザイナーの皆川明さんが95年に設立したファッションブランド。詩情を込めたデザイン、日本各地の生地産地との連携により生み出されるテキスタイルを特徴とする。劇中、服をより楽しむことができる仕掛けがあるので、そちらもお楽しみに。



撮影:井上佐由紀

撮影:井上佐由紀

3 collaboration 穂村弘(歌人) & 又吉直樹(芸人) + 映画版で主演を演じた佐々木英明が映像出演

劇中、寺山修司を語る上で欠かせないモチーフである「母」について語る又吉さんや、役者が作った短歌を講評する穂村さんの映像がたびたび挿入され、観る者の想像力を喚起。さらに再演では、映画で寺山を思わせる津軽訛りの青年を演じた詩人の佐々木英明さんが映像出演。映画版『書を捨てよ〜』ファンはお見逃しなく！

撮影:井上佐由紀



左から穂村弘さん、又吉直樹さん

4 collaboration 山本達久(ドラマー)が出演&音楽担当

ソロのほか、Jim O'Rourke / 石橋英子 / 須藤俊明とも活動。「達久さんと出会って、ドラムという楽器はいろいろなことができると思った」と藤田さん。ドラム等の音が舞台上でもう一人の登場人物のように存在するのが面白い。



札幌と、マームとジプシー。

岸田國土戯曲賞受賞作を軸に再構成した「AAA かえりの合図、まっけた食卓、そこ、きつと————」を、2014年に藤田さんの出身地である伊達市で凱旋公演以来、北海道公演のなかったマームとジプシー。「札幌にも作品を持ってきてくれないかな」と思っていた演劇ファンも多かったのでは？ その想いに応えるかのように、2017年は10周年ツアー第一弾として、札幌市教育文化会館で4作品、2018年2月には第二弾としてPROVOでの公演を実施。藤田さんは札幌国際芸術祭2017のプログラム「さっぽろコレクティブ・オーケストラ」でも演出を担当し、札幌がぐっと身近に。トークイベントでは「札幌で演劇や芸術を支えている人たちがものすごく熱心で、そういう人たちに会って安心したというか…こういう情熱で表現を見守っている人たちがいるんだって思うと、やっぱり僕もそれに応えたいと思った」と語っていた藤田さん。札幌とマームとジプシーのご縁が今後も深まっていくことを期待して、11月に『書を捨てよ〜』を持ってくる彼らを札幌市教育文化会館で迎えましょう！

いくつか見た？ これまでの札幌上演作品



1 撮影:井上佐由紀

2 撮影:井上佐由紀

3 撮影:井上佐由紀



撮影:井上佐由紀



撮影:井上嘉和

- 1)「AAA かえりの合図、まっけた食卓、そこ、きつと————」
- 2)「夜、さよなら 夜が明けないうまま、朝Kと真夜中のほとりて」
- 3)「クラゲノココロ モモノパノラマ ヒタリメノヒダ」
- 4)「あつこのはなし」
- 5)川上未映子 × マームとジプシー MUM&GYPSY 10th Anniversary Tour vol.2『みえるわ』

【プロフィール】

マームとジプシー

藤田貴大が全作品の脚本と演出を務める演劇団体として2007年設立。俳優、テクニカルスタッフ共にほぼ同メンバーで活動するものの、カンパニー化はせず作品ごとに出演者とスタッフを集め創作を行っている。ほぼ、2カ月に1本の驚異的なペースで演劇作品を発表。2012年よりオリジナルの演劇作品と並行して、他ジャンルの作家との共作を発表。様々な形で演劇作品を発表し、演劇界のみならず様々なジャンルの作家や観客より高い注目を受けている。